



ひとまわり

愛媛大学の藪谷先生よりバトンを引き継ぎました阿南工業高等専門学校^{（阿南工業高等専門学校）}の山田です。藪谷先生には、私が博士後期課程を修了するまでの間ご指導いただきました。執筆の話^{（執筆の話）}を頂いたときには、まさか自分がこの^{（ページ）}頁を書くとは！と驚きましたが、先生の「若手の高専教員は日本分析化学会でも珍しいから」という言葉を真に受け、私が高専に勤めて経験したことなどをご紹介します。

まずは高専をよく知らない方のために、その規模を簡単にご説明しますと、高専は全国に57校（国立51、公立3、私立3）あり、5年間のカリキュラムである本科に55,331人、その後更に2年をかけて学ぶ専攻科に3,434人の学生が所属しています（平成24年時点）。現在、全国の中学校卒業者は毎年120万人程度ですから、その中から高専に進学する生徒の割合は0.92%ということになります。一方で、工学系新卒技術者に占める高専卒業者の割合は12%と言われており、この位の数字になると工学系に身を置く皆様の感覚とも一致してくるのではないのでしょうか。

さて、私はと申しますと徳島大学の高柳・藪谷先生のもとで学位を取得し、2014年4月に阿南高専に着任しました。内定を頂いてから勤務開始までの期間がとても短かったこともあり、慌ただしくする間に学校が始まりました。挨拶まわりや伝統ある寮に入り一夜にしてドラマチック（ドラスティック？）に変わった新入生の姿を見て、自分が高専教員になったことをじわじわと実感したのを覚えています。と同時に、私の中では迫りくる初講義（しかも90分！）への不安が募っていました。恥ずかしながら私、それ以前に講義を受け持った経験がなく、事前に得ていた情報は「酸化と還元」の単元からスタートすること、自分の講義には相手を睡眠へと誘う呪文“ラリホー”の効果があるようだということだけでした（面接での15分模擬授業ですら効果を見せていた）。不安は恐怖へと変わり、結局、最初の講義前夜は一睡もできず…。その結果、どのような講義になったかは皆様のご想像にお任せしますが、やはり講義の受け手

と送り手では全く違うことを痛感させられました。そこからの試行錯誤で分かったことは、当たり前ですが「学生と教員の信頼関係」と「講義に関する（ちょっとした）知識と経験」が大切だということでした。前者に関しては、高専教員は寮や部活など学生と関わる機会に不自由しませんので、徐々に知る学生の範囲を^{（ひろ）}広げるよう努めました。後者に関しては、研修で得た知識や先輩教員のアドバイスを参考に、色々と試してみようという学生の反応を見るようにしました。私のような初心者は、沈黙を恐れるあまりどうしても話を長々としてしまうため、かなり意識して間を作るなどしました。一年半が経った今、少しは良くなっていると思いますが、学期末の授業評価アンケートの回答に心が痛まないことを願うばかりです。

仕様もない話を続けてしまいましたが、最後にこのコーナーへの感謝を申し上げておきたいと思います。現職の面接に臨む前、私は本棚から「ぶんせき」を引っ張り出してエッセイをパラパラと読みながら、人の繋がりの不思議さや面白い考え方（教育や研究への^{（つな）}パッション）に思いを馳せました。効果の程は未知数ですが、結果オーライということで良い方向に働いてくれたと思っています。また、タイトルの「ひとまわり」は、大学でご指導いただいた藪谷先生と私の、そして私と初めた^{（えと）}担当した学生の、年齢差であります。何となく同じ千支^{（えと）}というのは親近感を覚えますが、面白い巡り合わせだと感じたのでタイトルにしました。「平成生まれが大学に入学して来たぞ！」と騒いだのも今は昔、いまや教員としてひとまわり以上離れた学生を指導する立場です。

さて、次号のエッセイは慶応義塾大学薬学部の蛭田勇樹先生にお願いをしました。蛭田先生と私は同級生で、D3の時に参加した千葉幕張でのJASISで一緒に来ています。次にエッセイをお願いするのは蛭田先生しかいないと強引にお願いをしてしまいましたが、快く引き受けていただきありがとうございます。来月号、楽しみにしております。

〔阿南工業高等専門学校 山田洋平〕